HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	黄色い仮面のオイディプス : アイヌと日英博覧会
Author(s)	宮武, 公夫
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 115, 21-58
Issue Date	2005-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34083
Type	departmental bulletin paper
File Information	115_PL21-58.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 115 (2005)

黄色い仮面のオイディプス
――アイヌと日英博覧会――

宮 武 公 夫

序 章

20世紀初頭に開催された，セントルイスとロンドンの博覧会に，それぞれ10名近くのアイヌの夫婦，若者，幼い子供達が海を渡って参加し展示された。それらの人々は数ヶ月の間，北海道からはるばる運ばれたチセの中で生活し，儀礼を行い，工芸品を作って観客に販売した。それらの博覧会は，ほとんどの西洋人や，和人である日本人が，初めてアイヌの人々と出逢ったと同時に，アイヌの人々にとっても見知らぬ人々との最初の日常的な接触を経験する機会だった。(注1) それは，アイヌ，日本，そして西洋という三つの異質な要素が不思議な姿で混淆した過渡的な空間だった。

そのような「ヒトの展示」が行われた博覧会が開催された明治末期は，日清，日露の戦争に勝利して，国際社会の一員として認知されるようになった日本が，その「優秀性」や「独自性」を自己確認し，世界の中での「日本」という強い自己認識を持ちつつある時代だった。その一方で，先住民社会の解体が進み，多くのアイヌの人々は伝統的な共同体から強制的に追放され，日本社会に包摂されていった。1869年に北海道と改称された蝦夷地では，伝統的な習俗の多くが禁止され日本語教育が進められる一方で，1899年には旧土人保護法が公布され，日本への同化と排除が混在する政策が進められていた。(小熊 1999；50-69) また1895年の「台湾割譲」以来，いち早く植民地統治の行われていた台湾でも，同化政策の難航と予想外の抗日闘争に苦慮し

ていた。さらに，日英博覧会が開催された1910年は「日韓併合」の年であり，その前年には伊藤博文が独立運動家の安重根にハルピンで暗殺されるなど，韓国・朝鮮においても民族意識が高まりつつあった。

このように，博覧会が開催された20世紀初頭は，先住民社会が急速に日本社会に包摂され，それまでの生活環境を奪われ，伝統的な文化が破壊されたのと同時に，日本社会は植民地主義を強化し，ファシズムへと突き進んでいった。その時代は，日本が西洋との関係を通して近代社会のなかで自己成型すると同時に，アイヌが入れ子構造のように日本と西欧を通した自己成型を模索する過程でもあった。そして，日本が国民国家として純化されるにつれて，アイヌと日本の関係はそれまでの柔軟さを失い，非対称的なものへと固定化されてゆく。しかも，アイヌにとっての時代は，同化と差別という矛盾を内部に孕みながらも，それを解消する制度的あるいは理論的手段を備えることが許されない，二重拘束の固定化でもあった。このように，20世紀初頭から1910年の日英博覧会博覧会までの記録を通して見ることの出来るアイヌは，その後の日本社会を支配した「単一民族国家」神話が成立してゆく過程で，歴史（先住民としての歴史）が否定される一方で，出自（独自のアイデンティティ）を明らかにすることを禁止され，「日本人」を演じて生きなければならなかった。それは20世紀末まで続く，アイデンティティを否定されながら，「日本人」を演じ続けなければならなかった，一つの悲劇の始まりだったといえるだろう。本稿では，このような結節点的な時期に開催された博覧会におけるアイヌの展示を通して，日本社会のアイヌへのまなざしの変容と，アイヌの人々のしたたかな対応を明らかにしてゆきたい。

第1章　日英博覧会と「日本余興」

1902年に結ばれた日英同盟の下，友好関係にあった日本と英国が新時代を告げるべく開かれた日英博覧会は，3年あまりの準備期間を経て，1910年の5月14日から10月29日までの約6ヶ月間，ロンドンのホワイト・シティー

で大規模に開催された。そして日本はこの博覧会に，それまでの博覧会参加費用としては最高額の208万円を注ぎ込んだ。(Hotta-Lister 1999; 222) このように入念に準備された日英博覧会だったが，開催直前の5月6日に英国王エドワード七世が急逝するという予想外の出来事により，英国中が喪に服するため開会式が中止になったほか，新聞や雑誌には服喪中に祝祭気分を控えるため，博覧会を大きく伝える紹介記事はほとんど掲載されなかった。そのような悪条件下で開催されたにもかかわらず，もっとも盛況だった9月24日の日本祭当日には，1日で46万人以上の観客が訪れたほか，開催期間の合計では835万人もの観客が訪れ，英国における博覧会としては大きな成功を収めた。(Mutsu 2001: 179)

この博覧会では，他の博覧会と同様に，主要な展示館として産業宮，歴史宮，芸術宮などとよばれる大きな建物が建てられ，当時の革新的な産業技術や，各地の工芸・美術品の展示が大規模に行われた。そのほか，日清，日露の戦争に勝利して，東洋における中心的地位を確立しつつあった日本は，海外の博覧会では初めて，34名からなる軍楽隊を参加させたほか，赤十字展示を行って国際社会の一員であることを誇示した。さらに，巡洋艦生駒の乗員など約800名が出席する大規模な記念晩餐会が開催され，東洋の軍事大国としての日本のすがたを英国民に強く印象づけた。また，東洋宮と呼ばれる展示区域には，日本の植民地支配下におかれて間もない台湾，満州，朝鮮などの展示館が作られていた。

これらの公式出展物のほかに，観客を楽しませるための余興区域には，伝統的な日本のすがたを紹介する日本村が造られた。そこでは，古来の日本の生活や文化を再現したほか，職人による工芸品の実演販売などが行われた。そして，このような余興区域の一角に，日本から3棟のチセが移築され，10名のアイヌの人々が半年余り生活していた。(Hotta-Lister 1999)

このような余興について，明治45年(1912年)に農商務省から出版された『日英博覧会事務局　事務報告』は，詳細な報告を載せている。そこでは，余

興の重要性が次のように述べられている。

「近時各国ニ於ケル博覧会経営方法ハ出品物ノ選択ニ深ク意ヲ用フルト同時ニ大ニ余興ノ興行ニ力ヲ致スニ至レリ蓋シ観覧人ヲ誘致スル上ニ於テモ又余興場ニ課スル敷地料及特許料等カ博覧会ノ重要ナル一財源ヲナス上ニ就テモ余興ヲ博覧会経営上ノ一大要素トナスニ由ルモノナルヘシ是ヲ以テ日英博覧会当事者ニ於テモ亦大ニ余興ノ為メニ意ヲ注キタリ」(農商務省1912；866)

また，博覧会前年の明治42年9月6日に，陸奥廣吉から日英博覧會事務官長和田彦次郎に宛てた「余興に関する件」という報告には，当初日本側が計画していた余興の企画案と具体的な展示計画が示されている。この報告で「余興の種類」として挙げられているのは，パノラマ，相撲，田園模型，各種の見世物芸，台湾生蕃村落の模景，活動写真，奈良大仏の模造などで，そこにはまだアイヌや台湾先住民の展示は含まれていない。また，『日英博覧会事務局　事務報告』は，余興には博覧会事務局が「直接従事」するのでなく，選択監督上の許否についての権利を保留するだけで，「本邦ノ品位ヲ損スルモノハ一切之ヲ許容セサルコトニ方針ヲ定メ」，「英国当事者ノ希望ヲモ参酌シ」決定するが，その具体的な実行方法については当事者に任されているとしている。

ところで興味深いことに，この報告には，「明年の博覧會々場ニ開設セラルベキ諸種ノ本邦余興ヲ一手ニ経営スル為メ英国有志者ヲシテ一ノシンジケートヲ組織セシムル事」と書かれ，少なくとも3名の「英国紳士」からなるシンジケートと，交渉および事務処理役の日本人が任命されたと書いている。(外交史料館資料『日英博覧會開設一件』) 当時の日本には，海外での博覧会「余興」(attraction)の準備や運営だけでなく，経理面や運営面に精通した人材がまだ育っていなかった。そのため，「日本余興」の準備のために活動する，英国人からなる「シンジケート」が組織され，運営経費として英貨5万ポン

ドが日本側から出資されたのだ。その代表として任命されたのは，英国美術院会員のアルフレッド・パーソンズだったが，パーソンズが来日困難になったため，その代理として画家のジュリアン・ヒックスが任命され，明治42年11月27日には交渉委任の覚書が交わされ来日している。ヒックスの活動には，「日本官憲ヲシテ同人ノ権能ニ関シ安意セシメム」として，日本の行政組織が協力することになった。そして，ヒックスが「日本余興実演者」との直接の交渉や契約に当たり，実演者の帰国費用などを支払うために，5千ポンドが駐日英国大使に供託された。また，芸人，職人などの雇い入れや，事務処理や監督の任に当たる日本人として，1893年のシカゴ博覧会や，1904年のセントルイス博覧会など，当時では数少ない海外の博覧会での経験をもつ，興行師の櫛引弓人が「余興統轄代表者」に採用された。(農商務省　1912；867-870)(注2)

それでは，英国人のシンジケートを中心に企画された展示内容は，どのようなものだったのだろうか。準備段階の資料には，すでに展示内容として「アイヌ村落」や台湾屋外余興が含まれていた。

「アイヌ」村落　建物装置等一切シンジケート負担
　　「アイヌ」十人監督者一人給料，手当，旅費支出ノ上雇入ルコト
　　適当ノ人ニ委任シテ経営スルコト
台湾屋外余興　　同右
（外交資料館資料『日英博覧會開設一件』明治42年11月）

これと同様の余興の内容を，『日英博覧会事務局　事務報告』にも見ることができる。

一　会場内ニ日本家屋数軒ヲ建築シ其ノ内ニ於テ日本物品ノ製作実演ヲ為スコト
二　「パノラマ」的ナル我田園ノ模型

三　アイヌ村落
四　台湾蕃人ノ生活状態
五　本邦演劇
六　独楽曲芸，手品，山雀芸，水芸等
七　活動写真
八　要馬術

これらの資料から，日英博覧会におけるアイヌや台湾先住民の「ヒトの展示」が，博覧会経営上重要な要素であり，興行による利益を目的として，英国人シンジケートによって企画され実現したことが理解できる。それは，植民地経営と結び付いて植民地統治の成果と正当性を示すための，台湾館や朝鮮館の植民地展示とは対照的に，観客を集めるために経営上重要な，見世物や余興の一部として明確に位置づけられていたといってよい。

第2章　アイヌの展示

ヒックスは，1909年12月14日に東京に到着し，16日には博覧会東京事務局に出向いて打ち合わせを行っている。ヒックスの立案による，アイヌと台湾先住民の渡航案は，次のようなものだった。(農商務省　1912；868-870)

「台湾生蕃及『アイヌ』ニ関シテハ事務局ハ照会斡旋ノ労ヲ執リ而テ余興ノ各種類ヲ通シ芸人及職人ノ員数給料等ハヒックスト余興当事者ト直接ノ交渉ニ因テ之ヲヶ決定シ東京事務局之ニ承認興ヘタル末結局二月ニ入リテ彼我当事者間ノ契約締結ヲ見且興行ニ要スル器具及諸般材料ノ購入等ヲ了シ三月二日出帆ノ熱田丸ニテ左ノ芸人及職人ヲ渡英セシムルコトトナレリ(余興参加者の職業別および員数の表が挿入される)右ノ外台湾生蕃ニ就テハ総督府民政長官及ヒックス間ニ契約締結セラレ両社ノ生蕃二十四人警部一名巡査一名監督ノ下ニ二月十六日門司ヨリ乗船シテ渡英セリ」(農商務省　1912；869-872)

『日英博覧会事務局　事務報告』の日本余興参加者の一覧表には，男187人，女48人の総勢235人が余興参加者として挙げられている。そのなかには，陶器，織物，金属細工など多くの工芸分野の職人とともに，奇術師，丸太乗り，独楽回しの見世物芸人，それに大碇鳳凰をはじめとする角力力士の一行35名などが含まれていた。それらに加えて，男6名，女4名の計10名のアイヌの人々のほか，「アイヌ監督」と呼ばれる男1名が含まれていた。これら日本からの余興参加者のほか，「総督府民政長官及ヒックス間に契約締結セラレ」た台湾生蕃24人と，監督に当たる警部1名巡査1名が2月16日に門司から乗船して渡英した。

ところで，このような余興の内容は，江戸期以前からの見世物のジャンルと非常に類似している。朝倉無声の『見世物研究』は，室町時代以降の，おびただしい数の日本の見世物を紹介しているが，見世物は三つのジャンルに分けられている。第一に，手品，軽業，曲独楽，力曲持などの身体技術類。第二に，奇人，珍禽獣，異虫魚，奇草木石などの自然の奇物類。そして第三に，練物や張抜きの人形から，籠貝紙菊などの細工物類である。(朝倉　2002；3)

江戸から明治初期に至る見世物の中で，二番目に挙げられている「奇人」のジャンルには，当時の人々が物語や浮世絵の世界でしか触れることの出来なかった外国人，「異国人物」が含まれていた。しかし，当時はこのような異国人物を実際に見せることは不可能だった。そこで幕末の人形職人達は，想像上の「異国人物」をかたどった人形を生み出した。それが，生きた人間のようにリアルに作られた，「生人形」と呼ばれる人形だった。「生人形」は，生きた人間そのままに作られた，ほぼ等身大の人形で，「活人形」，「活偶人」，「生木偶」とも呼ばれた。安政元年（1854年）に，肥後熊本出身の人形職人，松本喜三郎が大坂にわたり，難波新地の見世物小屋で興行した題目が，「鎮西八郎島廻り　生人形細工」だった。これが，「生人形」の名が冠された初めての興行だったが，「真に生るが如きよくできしなり」と，大きな評判を呼んだ。そして，翌年には同じ出し物で江戸へ下り，見世物の中心地だった浅草奥山

で興行をおこなった。

これらの見世物に現れたのは，異国の「島廻り」の際に出逢った「島人」だったが，それらの「島人」は，奇人見世物として異国人物が形象化された姿だったといえるだろう。これらの異国人物は，伝承物語や，絵本・浮世絵の画材といった近世文化を通して，ひとびとの豊かな想像力の一部を占めていった。想像上の異国人物が，生人形のリアルな身体として再生され，黒船などの社会情勢を背景にして異国への関心を増幅し，多くの人々に受け入れられたのだった。また，このような生人形の人気を支えたのは，それまでになかったリアルな人肌だったが，このようにリアルな異国人物の生人形は，1903年の第5回内国勧業博覧会に設けられた台湾館においても，台湾着装標本と題して10体が展示されていた。(月出　1903，川添　2000)

このような生人形とは別に，博覧会という新たな展示空間で「展示」されることが可能になったリアルな身体が，植民地における先住民の人々だったといえるだろう。それまでの空想的な物語を超えて，新たに人々の前に現れた，リアルな「島人」あるいは「異国人物」が，人々にかってない驚きをもたらし，新たな説明や解釈を生みだしていった。そのための展示装置として，博覧会が利用されたのだ。(木下　1999)先にのべた，日英博覧会の余興に含まれていた，さまざまなジャンルは，明治後期の日本社会で「余興」のカテゴリーにどのような領域の人々が含まれていたかを教えてくれるが，それらは江戸期とほとんど変わらなかったといえるだろう。(朝倉　2002；3)

では，このような余興の展示とは，具体的にどのようなものだったのだろうか。朱塗りの楼門や21軒の日本家屋を構えた「フェアー，ジャパン」(美的日本) と呼ばれた地区には，最大の余興施設が設けられた。そこでは職人の製作実演や工芸品の販売，喫茶店での日本女性による日本茶の提供，手品の公演などがおこなわれた。また，「ポエチック，ジャパン」(詩的日本) と呼ばれる地区では，大きな日本庭園や8軒の日本家屋を設けた村落風景が造られ，日本の原風景を体験することができた。さらに，「『アイヌ』村落 (約900坪) 及台湾部落 (約1300坪) ニシテ一ハ『アイヌ』部落ヨリ斉シ来リタ

ル数個ノ茅家ヲ以テ部落ヲ構ヘ『アイヌ』人之ニ分居シテ其ノ生活ヲ営ムカ如ク設備シ一ハ蕃社ニ模シテ生蕃ノ住家ヲ造リ蕃社ノ情況ニ擬シ生蕃此ノ処ニ生活シ時ニ相集リテ舞踏シタリ」というように，アイヌや台湾先住民の展示が行われていた。(農商務省　1912；873) このほか，会場内で販売された『公式ガイド』では，「余興 (The Attraction)」として角力小屋や歌舞伎小屋などが紹介されているほか，「フェアー，ジャパン；日本の本質(Fair Japan; Japan in Essence)」として，宇治平等院を模した建物や台湾集落と並んで，アイヌのチセが紹介されている。(Japan-British Exhibition, Official Guide; 1910: 81-88)

ところで，列強の仲間入りをしつつあった当時の日本は，自己と他者の差異を，人種理論のもとに文化や倫理的慣習によって確認し支配するという，西欧の支配的イデオロギーと装置を取り入れつつあった。そしてアイヌだけでなく，日本が支配する台湾，朝鮮，満州の展示はすべて，近代日本の「進歩」，「近代化」，「文明化」を具体的に指し示すものとして用いられたという，ポスト・コロニアリズムの視点からの博覧会研究が一般的である。(Street 1992: 123) 日韓併合が行われた 1910 年に開催された日英博覧会は，そのような植民地主義完成への大きな結節点となったはずである。しかし，そのような指摘にもかかわらず，当時の博覧会資料におけるアイヌや台湾先住民の展示に関する記述は非常に少ない。それは，アイヌや台湾先住民の展示は，植民地支配の正当化を目的とした，台湾館や朝鮮館におけるイデオロギー的・教育的な植民地展示とは異なり，観客の関心や好奇心を引くために，経営上重要な「余興」あるいは見せ物として企画されたからだといえるだろう。

見世物とは，「文化構造の臨界点のようなところにふれているきわめてラジカルな娯楽である。それは文化なるものがくずれ落ちようとする瞬間に人々が立ち会う機会をあたえ，それによって人々に快楽や歓びや驚きを，またごくまれには不安や不快感を呼び起こそうとするのである」。(中沢　1983) そのような見世物とは，視覚的なオブジェを観客に見せる特殊な娯楽装置であり，一定の時間軸に沿って観客を巻き込んでゆく芝居などとは異なって，中



フェアージャパン（著者蔵）



展示されるアイヌの人々（著者蔵）

断された時間の裂け目から現れる「視覚のカタストロフ」とでも呼ぶべきものである。見世物には芝居などの持つ物語性が欠落し，切断された時間と空間の中に不意に現れる異質の存在が，見るものを「視覚のカタストロフ」に引き込んでゆく。このような見世物のジャンルの中で，人々を最も強く「視覚のカタストロフ」の引き込むもののひとつが，ヒトの見世物に他ならないだろう。(朝倉　2002；553)

このように余興や見世物は視覚的スペクタクルとして人々の感性に直接訴える。そのため博覧会における余興としての展示にも，多くの説明や物語は不用なのだ。多数の写真や解説を盛り込んだ，550頁余りの英文の博覧会公式記録のなかで，アイヌに関連する記述はただの1カ所にすぎない。そこでは，相撲や見せ物小屋などの娯楽展示についての説明と並んで次のように書かれているだけである。

「アイヌの住宅にはアイヌ（島々の未開な人々）の一団が住んでいる。日本が国家として目覚めた黎明期に，彼らは徐々に本州から現在居住している蝦夷へと追い立てられた。日本政府は彼らを保護し保存する最大限の努力を行っているが，一八八二年以来その人口は増加することがない。アイヌの男たちは垂れ下がる髪と顔中の髭をたくわえ，女性たちは口と腕に入れ墨をしている。熊は特別な愛情の対象で，それぞれの村では囲いの中で注意深く世話をされている。またアイヌはアーリア人に属するように見える。」(Shepherd's Bush 1911: 117)

1904年のセントルイス博覧会におけるアイヌは，長期にわたって北海道で宣教を行ってきたバチェラーなどの宣教師によって，強いキリスト教の影響を受けていたことが知られている。(Srarr 1904，バチラー　1928) それに対して，日英博覧会のアイヌについては，キリスト教や，宣教師との関係を伺わせる資料は見られない。セントルイス博覧会に参加するアイヌを人類学者のスターに紹介した宣教師のバチェラーは，1908年12月から4度目の帰国

を果たすため日本を離れ，1909年の1月25日にロンドンに到着して，当地で明治天皇から30年余りのアイヌ救済活動と研究に対して勲四等の勲章を授けられている。そして，日英博覧会が開催される1910年初めまで英国に滞在しているが，日英博覧会でアイヌと接触したり展示に関与した記録は残っていない。(バチェラー　1965；253-267) これらのことから，日英博覧会の場合には，6年前のセントルイス博とは異なり，キリスト教や西欧社会の影響を受けない人々が選ばれ，日英の人類学者や宣教師がアイヌの展示に関与したり，参加したアイヌの人々と接触することはなかったと考えられる。参加者が選定された経緯については，のちに詳しく述べることにする。

また，人類学展示を大きな博覧会のテーマとしたセントルイス博覧会においては，スターの『アイヌ・グループ』や，専属写真家ビールズの一連の記録写真，あるいは人類学展示に関する詳細な記録や写真を掲載した博覧会記録に相当するような，アイヌについてのまとまった報告書や記録が多く残されている。(Starr 1904, Fox & Sneddeker 1997, Breitbart 1997) これに対して，1910年の日英博覧会のアイヌについての記録は断片的で，詳しい記録は残されていない。そして，公式記録におけるアイヌの写真としては，僅かにチセの写真が1枚掲載されているだけである。この理由として，米国の人類学者や宣教師などによって「学術的」に企画され，組織されたセントルイス博覧会の人類学展示と異なり，日英博覧会におけるアイヌの展示が，正規の出展物とは別に企画された「余興」の一部として，英国人シンジケートと日本人興行師によって企画されたことが挙げられるだろう。その展示は，日本政府の間接的ではあるが厳格な管理のもとに興行として企画されたが，博覧会関係者は，参加したアイヌの歴史や文化には全く関心を示さず，単に集客上必要な見世物的側面に主要な関心を持っていたのだ。

第3章　展示された人々

主催者側の展示内容への無関心の一方で，博覧会で展示されたアイヌの人々は，余興の演者にとどまらない，高い意識と使命感を持った社会的成功

者だった。それらの人々は，帰国を拒否したり行方不明になる心配のない，日本の行政機関が安心して推薦することが出来る社会的地位を持った人々であり，海外でも恥ずかしくない「日本国民」でもあった。また，近代国家日本が「文明化」に成功しつつある，アイヌ社会を象徴する人々として選ばれたとも考えられるだろう。

つぎに，この日英博覧会で展示されたアイヌとは，どのような人々だったのかを具体的に見ることにする。外務省外交史料館に残されている，東京府の発行した明治43年2月中外国旅券発行下付表には，次のような10名のアイヌ渡航者全員の名前を見ることができる。いずれも「保証人」は日英博覧会事務局，「旅行地名」は英国，「旅行目的」は余興出場，「下付月日」は2月15日となっている。

旅券番号	氏名	本籍地	年齢
一五〇四九四	門別シノツテカン	北海道日高国沙流郡門別村	五十五年二ヶ月
一五〇四八七	門別ぬかつとけ	同	同
一五〇四九六	平村カナカトク	北海道日高国沙流郡平取村	六十二年二ヶ月
一五〇四八八	貝沢シランヘノ	北海道日高国沙流郡二風谷村	四十七年二ヶ月
一五〇四八九	貝沢あんれとく	同	四十二年二ヶ月
一五〇四九〇	貝沢すえ	同	十七年二ヶ月
一五〇四九一	貝沢善助	同	八年十ヶ月
一五〇四九二	貝沢賢治	同	

二十四年七ヶ月
一五〇四九三　貝沢らたらしの　　同
二十九年二ヶ月
一五〇四九五　貝沢忠吉　　同
一年十ヶ月

この旅券資料で興味深いのは，発給地が東京府であり，明治37年の旅券下付表にあった氏族や平民という族称蘭が無くなっている点だろう。代わりに設けられた身分蘭では，日本人の旅券下付者では全て，戸主や妻，長男などと記入されているのに対して，これらアイヌの10名に関してのみ空欄となって，同じ「日本人」であるにもかかわらず，和人の日本人とは異なった扱いとなっている。その一方で外交史料館の外国旅券発行下付表によると，明治37年（1904年）のセントルイス博覧会参加者のために下付された旅券は北海道で発給され，身分蘭にも戸主や妻などと和人と全く同様に記入されている。このことは，二つの博覧会で「日本国民」として旅券を発給されながらも，1904年と1910年の僅かな間に，アイヌの人々の日本国内での社会的位置が変化したことを示している。二つの旅券資料の比較からは，1904年から1910年の間に，地方単位で進められていたアイヌの国家的行事への参加が，直接東京で管理されるようになり，その行政的な取り扱いもアイヌだけを和人から分離した差別的なものになったことを知ることが出来る。このようなアイヌへのまなざしの変化は，旅券などの行政資料だけでなく，二つの博覧会における他者表象のメディアとしての，記録写真や絵葉書にも反映されている。

セントルイス博覧会におけるアイヌの記録写真は，時代の制約を受けながらも会場におけるアイヌの生活そのものを「科学的正確さ」で写し出そうとするものだった。それは，会場内でのアイヌの活動の一こまを写したスナップショットであっても，あるいは正装した記録写真であっても，アイヌの人々とその文化をありのままに記録し，それを世界の多様な文化の一部として理解し，人々に伝えようとするものだといってよい。しかし，日英博覧会では，セントルイスのようにアイヌの人々の生活や活動を記録した写真は見られな

い。それは，日英博覧会のアイヌが，正確な記録を残すべき文化や歴史の一部としてでなく，瞬時に現れては消え去る余興の一部として理解されていたことを反映している。また，セントルイス博覧会では土産物や記念品としてのアイヌ絵葉書は作られなかったが，日英博覧会では，博覧会場で販売されたと思われるアイヌの絵葉書が残されている。(注3) 20 世紀の初めには，世界中で記念絵葉書が流行し，数多くの記念絵葉書が発行された。(佐藤　1994)そしてセントルイス博覧会が開催された米国でも絵葉書は全盛時代で，さまざまな展示館を写した数多くの記念絵葉書が発行された。しかしそれらの絵葉書は，博覧会場の中心的な建築物や庭園，展示品などを写したもので，人類学展示におけるアイヌや他の先住民を被写体としたものはみられない。絵葉書や土産物（スーベニール）は，対象を切り取ることによって非文脈的な価値や権威を与える。(スチュワート　1996)それは，物語を必要としない見世物と同様である。セントルイス博覧会における人類学展示は，学習と教育のために行われ，絵葉書に切り取るべき娯楽や観光の対象とは明確に区別されていたため，人類学展示に絵葉書や土産物は相応しくなかった。その一方で，1910 年に日英博覧会で販売された絵葉書では，人物やチセだけが被写体として切り取られ，見せ物のように特異性だけが創り出され強調されて描かれているのだ。

第 4 章　ロンドンでのアイヌ

日英博覧会に参加し展示されたアイヌについて，出発前の様子を報じた日本の新聞や雑誌を見ることは出来なかった。これは，日英博覧会におけるアイヌの展示が，日本国内で日頃なじみ深い見世物と同じ，「余興」の一部として理解されていたためだろう。しかし，ロンドン到着直後のアイヌについては，雑誌『太陽』の日英博覧会臨時増刊号に掲載された「世界最従順の民アイヌ人を迎ふ」という記事が以下のように報じている。

「倫敦は今世界の最従順の民を迎へた。最従順の民とは将に滅せんとする

日本趣味の庭園

博覧會場には純日本趣味の二個の庭園がある。樹陰の濃淡年代を經た灌木、下り藤、實に配景の妙を極めてゐる。一つの方は會場の遙か隅角の方にあつて、觀覽車から見物される。此は總て材料を直接日本から持ち運ぶので、まだ工事が進んでゐないが、然し、金魚丈けはもう元氣よく泳いでゐた。眞紅色と銀色と、黒かとまがう紫色は眼を樂ましむるに足る。尾の先は鰭のやうになつて、泳ぐときは汽船の推進機のやうに動く、突き出てゐる目玉は又誰でも珍らしがるだらう。此の金魚も直接日本から來たので、航海中餘程死んだそうだ。

世界最從順の民アイヌ人を迎ふ

《デーリー、ニュース所載》

倫敦は今世界の最從順な民を迎へた。最從順の民とは將に滅せんとする人種の遺物アイヌの一行である。アイヌ人と一緒に同じ船から臺灣土人も來た、が、臺灣人は決してアイヌ人と混同視してはならぬ、——臺灣土人は決して從順な民で陸軍省、海軍省、赤十字社からの出品はまだ大部分到着してゐなかつた。夏季は日本の最良の軍樂を聞けることになつてゐる。それから、山葉商會から、オルガン、ピアノ、ヴワイオリンなど、西洋樂器の出品があるさうだが、之は日本に於て洋樂の需要を示すもので少なくとも注意すべき事實だらう。日本特有の角力もある筈、其他の武技も演せらるゝ筈、餘興のやうなのも出來る丈け大車輪でやられる筈。兎に角豫定通り進行して、吾人は居ながらにして、此の倫敦の日本で日本を窺はれるのは難有いことだ。

一昨年の英佛覽城會と同じ成功を收むることが出來るかどうかの問題は、今は唯天候の如何に由るばかりである。

太陽に掲載されるアイヌ到着の記事

人種の遺物アイヌの一行である。アイヌ人と一緒に同じ船から台湾土人も来た，が，台湾人は決してアイヌ人と混同視してはならぬ，――台湾土人は決して従順な民ではない。

婦人が四名，男子が四名，九歳の男の子が一人，赤ん坊が一人―総計十人のアイヌが来た。挙止動作の慇懃なのには大に吾人に教訓となるものがある。綺麗な，元気の宜い赤ん坊は母の背に袋の中に安々と眠っている。九歳の男の子は全く疲れ果てている。長い灰色の髭の年老けた一行の老紳士は余――デーリー，ニュース代表者――の間に一々ピヨコピヨコ頭を下げながらアチコチ歩く。矢張疲れ切つて仕舞って時々倒れそうにしては吃驚する。

アイヌ人はコーカサス人の色彩を帯びた小ぽけな人間だ。鳶色の綺麗な眼，黒々した顔容，漆のような毛髪，そして，長い髭，ブランケットに包まって身を装ふている様子はトルストイ風が思ひ出される。言葉遣いの温しいことは実に驚くばかりである。が，婦人の方は意志のように堅くなってジーッと口を噤んでいるのには変な気持ちがした。

『どんな気持ちだね！』と聞いて見た。処がカースウ（原文では Kaaswe）といふ一行の頭が――威風が備はって，然も温容な老紳士だ――三度辞儀をして，長い髭を振りながらこう云ふた。『全く異つた新しいことばかりです，天国ではないかと思つています，夢を見ているのではないかと思っているものもあります！』ローヤル，アルバート，ドックに初めて着いて天国のやうな四周を見たときは確かにこんな気持ちがしたに違ひない。

頓て地下鉄道で旅館に案内される事となったが，一行は怖がって昇降機から地下に降りるのを拒んだ。大方『天国』から他の底に送られるゝものと思ったに違ひない。然し他の乗客が平気で降るので漸く納得した。九歳の子供は怖さうに母親にシガミ付いていたが，間もなく又寝入って仕まつた。」（『太陽』第16巻第9号，1910；63-64）

この『太陽』の日本語記事は，日本の英字新聞である『The Japan Weekly Mail』の1910年5月21日号に見られる，〝Ainu in London〟という記事か

ら翻訳されたものである。また，『The Japan Weekly Mail』紙の記事は，英国の『The Daily News』紙4月16日号に掲載された，〝Ainu in London/ Politest People on Earth have a Rude Reception, "Heaven"at the Docks〟という記事をもとにして書かれたものだ。この『The Daily News』紙の〝Politest People on Earth〟というタイトルは，本来なら「世界で最も礼儀正しい人々」と訳すべきだろう。しかし，『太陽』に転載された記事では，「世界最従順の民」と訳されている。これは，当時の日本国内の言説が，植民地支配の政治的正当性と成果を主張する立場から，アイヌと日本の関係を歴史的あるいは人種的に位置づけることを故意に避けて，「文明」へと従順に同化される「滅びゆく人種」として描く必要があったためだろう。言いかえれば，この1910年のアイヌについての言説は，日本への同化を早期に達成しつつあった状況を背景に，アイヌを「従順」に包摂されつつある，「滅せんとする人種の遺物」として描いていたことを示している。(高木　1994；166)

また，翻訳された『太陽』の記事には，原文から省略されている部分がある。それは，「滅せんとする人種の遺物」という説明の直後にあった，アイヌの日本人に対する関係が，かってのブリトン人に対するサクソン人の関係と同じ，先住民族と現在の支配民族の関係であるという記述である。これと同じように，博覧会中に発行された日本の外国向け英字誌『ジャパン・マガジーン』の1910年10月号は，人類学者の坪井正五郎が「日本帝国の異なった人々」という英語の紹介文を載せているが，ここでも坪井は，アイヌをはじめとする日本帝国領内の先住民についての，人種的な概説をおこなうにとどまり，アイヌが日本の先住民であるかどうかについては触れていない。(Tsuboi 1910)(注4)

これに対して，先に述べた英文の博覧会公式記録や新聞記事をふくめて，英国で発行された新聞や雑誌では，アイヌが日本の先住民だったという記述が頻繁にあらわれる。たとえば，1910年3月25日付け『The Daily News』紙の「滅びゆく人種」と題する記事では，アイヌが，かって居住していた本州から蝦夷地へ次第に追われてきた，北米インディアンのような人種である

と紹介されている。さらに，開催直前に発行された『ジャパン・マガジーン』の3月号には，セントルイス博覧会にアイヌを招聘した人類学者フレデリック・スターが，「蝦夷のアイヌ」という紹介記事を載せている。この記事でスターは，アイヌが米国のインディアンのような，かっては日本全土に居住していたコーカサス人種に属する日本の先住民であり，現在は日本の影響によって急速に変容しつつあると述べて，エスニック・サルベージの必要性を語っている。(Starr 1910)

また時代が下るが，大正13年(1924年)にフレデリック・スタール(スター)によって書かれた『世界人種物語』でスターは「彼等は日本人と人種を異にし，白人種であると考へられている。モンゴリア人種ではない。皮膚の色は鮮明で，稍赤色或は黄色を帯びて居る。目は大きく，黄色人種のやうに斜めに切れていない」と書いている。(スタール　1924；149)

クライナーによれば，アイヌが黄色い肌を持つ日本人とは異なって，白人に近い肌の色や身体的特徴，あるいは文化的特徴を持つことは，博覧会と同時代の1910年以前には多くの言説に見られるという。デイヴィッド・ブラウンズは「アイヌの歌はノールウェーの民謡を思い出させると記している」。(1883年) あるいは，ヴィルヘルム・ヨーストは「アイヌがヨーロッパ人と同じ方法で，つまり身体の方向に向けてものを切ることやアイヌの男性がヨーロッパ人と同じように，衣服の襟を左前に着るという印象を受けた」。(1895年) そして，アイヌ民族のコーカソイド起源という仮説はルドルフ・ヴィルヒョウやエルウィン・フォン・ベルツなどの同時代の自然人類学者を魅了し，「ヨーロッパはついに，その世界支配の頂点において，共通起源を持つ民族，自身と自然の間に永遠の調和を保って生きて，ヨーロッパ諸文化よりも，ヨーロッパの遠い過去の共通祖先の文化に酷似している文化をを持つ民族を発見したのである。もちろん，このことは，一方ではアイヌに対する哀心からの親愛をしめす見解を意味し，他方では，日本人の植民地化による圧迫を厳しく，明確に批判することを意味した。」(クライナー　1997；16-19)また，19世紀末に北海道を紀行したイザベラ・バードも，アイヌの人々がヨーロッパ

的だと繰り返し述べている。(Bird 1881)

しかし，この一方で，当時の日本人によって書かれたアイヌに関する記述には，アイヌの人々の肌の白さやコーカソイドとの人種的親縁性に関する言及は見られない。鳥居龍蔵編纂，坪井正五郎校閲として出版された『人種誌』のなかの「あいぬ(ainu 或ハ aino)」では，皮膚の色をはじめとするさまざまな人種的特徴が述べられるが，コーカソイドあるいは白人との親縁性については全く触れられていない。(鳥居　1902) また，日本向けの『太陽』の記事で「コーカサス人」と訳されている部分は，原文では〝Caucasian〟であって「白色人種」と訳すことも出来たのだ。このように，アイヌの肌の色を通して「白人性」を発見しようとする西欧人に対して，日本人はアイヌの肌の白さや「白人性」については全く沈黙していることが特徴的だ。(注5)

ところで，小熊は『単一民族神話の起源』のなかで，明治から大正期にかけて，日本人は黄色人種ではなく白人であるという，「日本民族白人説」が田口卯吉や木村鷹太郎によって主張されたことを紹介している。これらの主張は，「白人」の優越性と黄色人種の劣等性を前提にしたものだったが，記紀解釈と言語学的な関連性を捏造することで，純粋な日本人は黄色人種ではなく，「皮膚の白くして且つ滑らかな」白人であり，西欧人と同等だと主張するものだった。欧米への劣等感（白人＞黄色人種＝日本人）を払拭できない明治期に，「日本民族白人説」によって「日本民族」の優秀性（日本人＝白人＞黄色人種）を主張せざるを得ない論者にとって，アイヌの人々が白人と同じ白い肌を持つ（アイヌ＝白人＞黄色人種＝日本人）ことは，決して認めることが出来ない事実だったといえるだろう。小熊によれば，昭和期にはいると小矢部全一郎や金田一京助が，アイヌと日本人は同じように「白人」に起源を持つという主張を行うようになるが，これは「白人説で〈救済〉されるべき対象は，もはや支配者に成長した日本民族ではなく，帝国内の被支配者のほうへ移っていった」結果であった。(小熊　1995；172-185)

このような明治末期における日本人とアイヌの非対称的な関係は，日英博覧会の他の資料からもうかがうことが出来る。当時英国に留学中だった内ヶ崎作三郎による「開会初日の印象」という記事が，『太陽』の日英大博覧会臨時増刊号に掲載されている。この内ヶ崎の記事は，海外における和人とアイヌの関係，あるいは博覧会に参加したアイヌがどのような人々だったかをよく示している。日本でバチェラーの著作を読み，アイヌに対する関心を持っていた内ヶ崎は，その開会初日を紹介する記事に，「アイヌ村の大繁昌」という以下のような一節を設けている。

「中に三個の小屋がある。第一の小屋には五六十歳の老人が一人あぐらをかいている。見物人がのぞき込む毎に丁寧に両手を捧げてお辞儀をする。第二の小屋には六人の家族がいるのなさうだが大繁昌で，一寸の隙間もないので，第三の小屋にゆく。ここにも一の山が築いてある。このうち一人のアイヌ君が混雑の中から押し分けて出でて来たから，君は日本語を話すかというと，少しは話すというが，中々立派な日本語，この男は真黒の髭が見事であるばかりでなく，中々賢い壮年だ。僕は色々アイヌに関する質問をしていると，今度は僕等の全面に五六十の見物人が寄って来た親切な老婦人などはこんなに見物人にたかられては気の毒なことだこれが初日だから夏中の見物人が大したことだろう，折々は外に出でて運動する様に注意して下さいなどといふのもあれば，子供を連れた，中年の紳士がどうだ。アイヌ君僕の子供をエゾ島へ貰って行ってくれぬかなどゝいふので子供さんが，恥かしがりて，親父さんの後に隠れたりするも面白い。僕はやむなく通訳官となって了つた。このアイヌは貝沢賢治君といふのである。貝沢君は細君と四五歳の男の子との三人にて第三の小屋に寝食しているのである。さて誰れかがその子供を見たいといふ。小屋の前は人ごみで見兼ている人々が多いのである。そこで，子供を連れて風通しの善い処で遊ばせよといふと，貝沢君はどうしてこの人込みを割って行こうかといふと，僕が英語で御免なさいといってやって小屋に入らした。間もなく子供が父に代わりて可愛がられる。老人達が，君も細君も中中美男子美人であるが，子

供も亦可愛などと，愛嬌をいふ子供の頬を撫でたりする人もある。一片の銅貨をくれた人がある，これに習う人が多く，またゝくうちに両手につかまれぬ程の銅銭を子供は貰って，父は有難うというて下さいと僕に頼む。貝沢君はアイヌ人で最初に陸軍に服した人なそうで髭が多いから年とって見ゆるが，明治一八年生れである。アイヌ人の減少することの原因は本人にも分からない西洋人の握手するのをみて，私共は別れる時にはあんな事をやります。これ丈が西洋人と同じ事をやりますといふ。その事を通訳すると，日本に行ったことのあるらしい紳士が『そうですか』などといふ日本語を用いて興を添ゆる。貝沢君はこんあ立派な方々に見られて恐れ上がると謙遜している。又どうやら僕の通訳にて色々な人と話をしたとて喜んでいた。僕は再会を約し，又アイヌ人の繁殖の急を説いて別れた。帰路第一の小屋にて老人と語る，年は六十五，妻子を置いて来たので里なつかしいといふ。まことに好人物らしいので，見物人が立派な顔だとほめる。此処でも見物人に頼まれて，この老人が百匹の熊を殺した剛の者なること，熊にさし込む毒矢の説明やら，アイヌの宗教のこと，酒を飲む時の特別の儀式のことなど，丁度来あはされたる吉田氏といふ監督者の話を通訳してやった。僕は老人を促して第二の小屋にでも行ってみなさいというて，庭に出して，アイヌ村と別れを告げた僕は幼時アイヌを見たのみで，話をしてみたのは此度が最初である。貝沢君やこの老人はまことに善い印象を僕に興へた。アイヌ人種保存は日本国民が世界の人類に負ふ大なる義務である。この人種を発達せしむるは義侠心のある邦人のなすべき名誉ある事業である。貝沢君の話では中学には幾人かのアイヌ青年がいるそうだが，僕はそれ以上の学校にも入学させる必要があると思ふ。米国の黒奴にはブーカーワシントンのごとき偉人がある。(注6) 適当の教育を施せば，アイヌの中より相当の人物が生ぜざるべき理由がない。僕はこの点に関して国民の注意を求めざるを得ない。」(内ヶ先　1910：46-48)(注7)

明治44年(1911年)に出版された，北海道庁嘱託である河野常吉の『北海道旧土人』によれば，北海道における徴兵令は，明治10年に函館，福山，江

差の3市ではじめて施行された。その後，道内各地にまで拡大され，明治33年になってようやく全道に及んだ。この中で河野は，アイヌに対する徴兵については，「明治二九年現役一名を徴収せしを始とし，以後年々徴収し，大正七年までの徴収総数は現役三百四十九人，補充八百三十八人に至れり」と書いている。また，明治37・38年の日露戦争において，「アイヌ中軍人として日露戦役に出征したるもの六三名にして，内戦死三人，病死五人，廃兵二人を出せり。戦功に依り金鵄勲章を賜はりたるもの三人，その他の勲章を賜りたるもの五一人あり」と，徴兵開始後間のない時期に始まった日露戦争にも，多くのアイヌ兵士が前線の兵士として参加したことを記録している。(河野1911；67-68)(注8)

この資料から，内ヶ崎が博覧会で出会った明治18年生まれで「最初に陸軍に服した」という貝沢賢二が，明治29年に徴兵された最初のアイヌ軍人だとは年齢的に考えられない。しかし，徴兵制度が満20歳での徴兵検査を義務化していたのに対して，志願者は20歳未満でも徴兵検査を受けることができた。(新門別町史・中巻　1995；886) これらによって，貝沢賢二は徴兵検査の義務年齢に達する以前に自ら志願兵として応召し，日露戦争に出征して戦功を挙げたアイヌである軍人の一人だったと考えられる。(注9)

第5章　アイヌの帰国

セントルイス博覧会におけるアイヌは，閉会後も最後まで会場に残り，博覧会長を表敬訪問したのちに，遠く離れた出港地まで関係者に付き添われ帰路についたことを，当時の新聞記事から知ることが出来る。(St.Louis Post-Dispatch, Dec. 6, 1904) それでは，日英博覧会のアイヌの場合はどうだったのか。『日英博覧会事務局　事務報告』には，アイヌ，台湾先住民，職人の一部などが，博覧会終了直後に帰国させられたことが，次のように書かれている。

「閉会後余興従事者ノ後始末ニ付テハ従来ノ海外博覧会ニ於ケル弊ニ鑑

ミ我事務局ハ日本余興者ノ全部ヲ二回ニ分チ第一回ハ製作実演職工ノ一部及『アイヌ』生蕃ノ全部ヲ閉会当日出帆ノ便船ニテ直ニ帰国セシメ残余ノ者ヲハ十一月十二日出帆の汽船にて帰国セシメタリ」(農商務省　1912；875)

ここで,「従来ノ海外博覧会ニ於ケル弊」と書かれているのは，セントルイス博覧会で脱走を企て帰国を拒否した芸者のように，従来の博覧会では帰国を嫌がり問題を起こすものが出たことを指していると考えられる。そして，日英博覧会のアイヌは，閉会するやいなや追われるように船に乗せられ,「後始末」されたのだった。(注10) このことも，日英博覧会のアイヌが，博覧会事務局や農商務省関係者によって，モノや他の余興参加者と同じように，単なる集客の道具として理解されていたことを示している。

しかし日英博覧会のアイヌは，何の言葉も発することなくロンドンを去ったわけではなかった。このようにアイヌをいち早く英国から隔離し，帰国させようとする博覧会事務局の意図に反して，1910 年 11 月 2 日付けの英国紙『デイリー・ニュース』は，帰国直前のアイヌが英国に残した,「アイヌの別れ：いかにロンドンがこの風変わりな人々を感動させたか」と題する興味深い記事を掲載している。

「私たちはかなり以前に,偉大な英国と美しい首都ロンドンについて聞いたことがありましたが，それを実際に見ることが出来るとは，思いもしませんでした。しかし，六ヶ月以上ものロンドン滞在でそれは実現したのです。これから故国と親族に再会できるのは喜びですが，帰国しなければならないことは残念です。私たちは以前には知らなかった，非常に多くのものを見ましたし，地面から湧き出たり，見えなくなったと思うと家庭までやってくる水（水道）に驚きました。また，ボタンを押すと地中から放たれる光や，目前で光が山を登るように照らされるのを見ました。私たちは，始めと終わりがわからないほど広大な都市や，自走する車や，数え切れな

い群衆や，各階に人が住む高層建築物，それに，初めて見る不思議な動物（動物園の回想）にも感動しました。男性や女性の背の高さも興味深かったです。……しかし，英国人の親切には最も驚き魅せられました。英国婦人の親切で優しい心には特に感動しました。私たちは，これらをもっとも敬服すべき点だと感謝しているので，帰国後は，この善意の婦人の豊穣な国について，仲間に伝え，子々孫々まで語り継がせるつもりでいます。」（Mutsu 2001: 180-181）

20世紀はじめのいくつかの大規模な博覧会には，約10名のアイヌが参加している。しかし，アイヌの人々がみずからの言葉で直接語り，現地のメディアに唯一残したのがこのメッセージである。この原文を作成した人物が誰だったのか，英訳された原文が口述だったのか，あるいは書かれたものだったのかは明らかでない。しかしこのメッセージは，海外に初めて渡ったアイヌが，自分たちを日本人や西洋人とは異なった存在として自覚して発表したものである。日本国内では，アイヌ自身によって書かれた，開拓使宛ての嘆願や誓願の文書の存在が以前にも知られている。それらの文書は，さまざまな困難や問題を解決するための，手段や道具として書かれたものだった。（小川・山田　1998）しかし，外圧や強制の結果や，目的実現のための手段としてではなく，アイヌが主体的に海外の人々に向けて発表したメッセージとしては，これ以前には見られないだろう。

この文章には，パリと並んで当時の世界最先端の近代都市であったロンドンで経験した，さまざまな驚きと英国人への謝意が満ちている。しかし，アイヌの一行がロンドンを去るにあたって残したメッセージを新聞社へ伝えたのは，アイヌに同情的だったはずの，内ヶ崎のようなロンドン在住の日本人留学生や，博覧会関係者，あるいは英国人ではなかった。それは，クラカウのポーランド科学アカデミー人類学委員会特派員という肩書きのブロニスワフ・ピウスツキが，帰国するアイヌに託されて寄稿したメッセージだった。

ピウスツキはポーランドの反政府活動家で，アイヌ研究で著名な人類学者でもあった。流刑者として長く生活したサハリンで，アイヌ研究や資料収集

を行った経歴を持つピウスツキは，日英博覧会開催当時はパリで亡命生活を送っていたが，ロンドンの日英博覧会にアイヌの人々が参加していることを知り，アイヌ調査と，蠟管レコードなどのアイヌ資料の売却のためにロンドンを訪れた。そして博覧会場での調査のために博覧会当局に許可証の発行を依頼したが，7週間もの粘り強い交渉を続けたのちも，アイヌとピウスツキーの接触が許可されることはなかった。(Kowalski 1995: 10-12) しかし，この帰国直前に発表された新聞記事は，その後の博覧会開催期間中に，アイヌとピウスツキーが頻繁に接触し，メッセージの翻訳と新聞社への持ち込みを依頼するだけの，強い信頼関係を結んでいたことを示唆している。

そのような，アイヌの人々とポーランド人人類学者の親密な関係の一方で，開会直後にアイヌと接触し，「アイヌ人種保存は日本国民が世界の人類に負ふ大なる義務である。この人種を発達せしむるは義侠心のある邦人のなすべき名誉ある事業である」と語った内ヶ崎の言葉にもかかわらず，博覧会場で日本人がアイヌの人々と交流し，その活動を理解したり協力したという資料は見当たらない。また，次に紹介する参加者の過去の記憶にも，博覧会での和人との接触についての具体的な記録を見ることは出来ない。このメッセージからは，ロンドンの博覧会に参加することで，初めて「異文化」や「異国人」に日常的に接したアイヌの人々の，素朴な驚きと感動を伺い知ることが出来る。しかしこのメッセージは，多くの芸人や職人たちと共に「余興」のために英国に渡り，用済みになるといち早く本国へ送り返された人々が，モノのように沈黙する，単なるまなざしの対象ではなかったことを示している。このようなエスニック・アイデンティティの自己成形の問題については，別稿で詳しくのべたい。

第6章　日英博覧会の記憶

セントルイス博覧会では，博覧会中のアイヌの人々の様子が頻繁に新聞・雑誌に報じられていたのに対して，日英博覧会開催中のアイヌの人々については，さきに述べた開会直後の新聞記事以外に見ることができない。また，

帰国後の記録もほとんど残されていない。しかし，二風谷の歴史と家族を紹介した沿革史『二風谷』に収められた「浜田寛家」を紹介する記事には，「明治43年英国ロンドンで開かれた日英博覧会にアイヌ民族として，私の祖父シランベノ，祖母あんれとく，父善助，伯母こきんの一家3人と平取の人が参加した」として，祖父シランベノの思い出話が残されている。(二風谷部落誌編纂委員会　1983，89)また，昭和58年にアイヌの古老を対象に平取町で聞き取りを行った，川上勇治の『エカシとフチを訪ねて』にも，以下のような貴重な回顧録が残されている。

「俺のエカシ（祖父）は，貝沢シラベノというんだ。エカシが明治四三年（一九一〇年）にロンドンの日英博覧会へ行った時は，四〇代そこそこらしかったから，戸籍でも調べれば，正確にエカシの生まれた年もわかるだろうけど，昔のアイヌは子どもが年ごろになると，漁場の雇いに強制的に連れて行かれるのを恐れて，子どもが生まれてもすぐには役人に届けを出さないでいたようだから，エカシはおそらく明治のだいぶ以前に生まれていたんだろうな。……（エカシは）明治の末ごろから，昭和のはじめまで，沙流川随一の馬産家にのし上がったし，二風谷の土地の七割も占めるような面積の土地持ちになったんだから，やっぱりエカシはたいした者だったんだな。

エカシは，若い時厚岸の漁場でシャモに使われて雇いした関係で，けっこう日本語もしゃべれたし，字もカタカナくらいは知っていたんだな。……昔二風谷で学校できたのは明治二〇年代だから，エカシたちは学校へ行ったわけでもないのにどうしてカタカナでも覚えたのかなと思ったもんだが，昔のエカシたちの仲間で誰かがカタカナでも知っている者があれば，一緒に酒飲みながらでも，お互いに教えあったという話だから，それでまあ，エカシもカタカナの字を覚えたんだべ。……親爺がちょうど10歳になった明治四三年にそのころ日本と同盟国であったイギリスから，平取の戸長役場へ連絡があって，それで戸長が直接家へ来てエカシに頼んだんだな。(注11)

そのころは，平取ほか八カ所箇村という戸長役場時代だから，村長と言わず戸長と言ったんだ。その戸長が，アイヌの人はたくさんいるけど，『シラベノさん，あなたが一番適当だと思うから，ぜひイギリスへ行って来てくれ』と懇々と頼まれて，それでエカシは行く気になったらしいが，エカシ夫婦のほかに，俺の親父善助が一〇歳，親父の義理の姉のこきんさんが一八歳だったそうだ。そのほかに二風谷から貝沢賢二さん夫婦，それに平取からも何人か行ったという話だけど，その行く準備も大変だったらしい。向こうへ行ってアイヌの二家族ほどが寝泊まりして生活するために，茅葺きのチセ（家）の材料を柱から屋根の茅まで，全部こっちから持っていったそうだ。それに生活に必要な鍋，食器類，カムイノミ（神への祈り）に使うイナウ（木幣）など。

そのころ早来まで汽車が来ているから，チセの材料やその他必要なもの全部馬橇で運んだんだそうだ。

そうして，早来の駅から，小樽まで汽車で輸送して，小樽の港で船に材料を積んで，エカシたちもその船で出発したんだという話だけど，小樽からイギリスまでの船旅は相当日数もかかったんだろうな。……やはり向こうで半年くらいはいたんだな。だから春早くこちらを出発して，向こうへ五月くらいに行くんだから，三月の末ごろにでも小樽を出たんでないかな。

エカシたちは，向こうの博覧会場でこちらから持っていった材料で，アイヌチセを建てて，そこでひと夏暮らしたんだそうだが。……そうして，エカシが帰ってから，二風谷のコタンの人たちを集めて，酒飲みながらロンドンの昔話をするんだな。台湾の高砂族も一緒だった話やら，俺が少年時代，エカシが何度もしゃべったのを記憶している。……エカシがイギリスに行ったときの報酬もどのくらいあったものか，詳しいことはわからないけど，とにかく一日にお客さんにもらう金が小さいサラニプ（シナノキの皮で編んだ手提げ袋）いっぱいに銀貨や銅貨が入ったというからたいした金だったらしいな。留守の間，農業のことは雇いの人にまかせていったらしいけど，まあ一年くらい農業を休んでもいいくらいの収入はあったんでないかな。

それから，エカシと一緒にイギリスへ行った貝沢賢二さんという人の子どもが，その年生まれたというんだ。(注12) それで，その子どもの名前をイギリスに行った記念に英博とつけたそうだが，その人は早死にしてもうこの世にはいないけどな。」(川上　1991：163-172)

終　章

高木によれば，日清戦争を契機とした植民地の領有とともに始まった，日本のアイヌ同化政策の登場は，「アイヌ民族に対する近世後期来の『日本人』への同質化政策の枠組みを継承し，植民地を視野においた異民族統治としての普遍的視野を確立することにある。したがって1899年の北海道旧土人法の歴史的意味は，アイヌ民族の卓越した『同化』達成という諸民族に対する冠たる目標と，異民族統治という視野の導入によるアイヌ民族への差別・排除の論理にある。」そして，「日本の植民地政策が同化主義の方針を確定する朝鮮領有後の1910年代に，アイヌ民族に対しても同化政策が行政の方針となり，日露戦後の社会改良と相まって社会的に一般化する。」(高木　1994；167) 1910年の日英博覧会に参加したアイヌの人々が，非キリスト教徒であり，軍隊出身者であり，日本語を話し，戸長によって選ばれた人々であり，旅券が東京で発給されていたことは，政府の同化政策の一環として日英博覧会でのアイヌの展示が理解されていたことを明確に示している。にもかかわらず，旅券の表記は和人と異なり，アイヌが参加したのは正規の展示とは明確に区別された余興であり，形を変えた「奇人見世物」だった。このような「同化」と「差別・排除」の矛盾する論理に拘束されたアイヌの人々は，ベイトソンの二重拘束状態にあったといってよいだろう。かれらは，「日本人」の一員として日本社会に同化され，保護を約束されながらも，その存在を実質的に否定され差別・排除されるという二重拘束の下におかれていた。そして，現実的にも象徴的にも，日本社会から逃れる事を許されない状態におかれていた。(Bateson 1958; 183-184) 日英博覧会における「アイヌ」とは，つねに未来へ向けて改善されるべき想像の共同体の一員であり，このように改善される

対象として取りあげられる「他者」としての「アイヌ」によって再生産されるのが，想像された日本国民とその歴史だった。しかし，それは同時にアイヌのような，国民とは異質の存在が，国民の中に放置されることに他ならなかった。(富山　1996；126-127)

このような「アイヌ」の姿は，ソポクレスの『オイディプス王』を想起させる。テバイの王ライオスは，やがて産まれる子によって殺されるという神託を恐れ，生まれたばかりの男の子の殺害を命じた。しかしその子は，哀れに思った羊飼いに救われ，オイディプスと名付けられ，コリントスの王子として育てられる。成人して恵まれた生活を送っていたオイディプスは，あるとき王の実子ではないことを知ることになる。そして放浪するうちに，偶然，実父のライオスの一行と出逢って諍いになり，何も知らずライオスを殺害してしまう。そののちオイディプスは，テバイの人々を苦しめていたスフィンクスの謎を解き，テバイの王として迎えられる。そして，先王の王妃であり，実母でもあるイオカステを妻にして，そのあいだに４人の子供をもうけてしまう。しかし，つかぬ間の平穏な歳月を経た後，再び国難がテバイを襲う。その理由を尋ねられた予言者ティレシアスは，その災いがオイディプスがおこなった，恐ろしい罪の報いであることを明らかにする。

『オイディプス王』の物語が博覧会の「アイヌ」と重なるのは，社会と自己，あるいは過去と現在の関係が，いかに表面上は平穏であっても危ういものであり，現実の存在そのものが，ときに否定された関係を前提として存在するにすぎないからだ。オイディプスは，本当の生い立ち（過去との関係）を知ることにより，現実の否定へと向かわざるをえなくなる。そして過酷な現実を直視出来ないオイディプスは，盲目となり闇の奥へと去ってゆく。現実の自己は，明らかにすることを禁止された過去との関係によってのみ存在したのだ。そして隠された過去が白日に晒された瞬間，現実の存在は否定され，崩壊せざるを得なくなる。そのオイディプス王の逆説は，独自のアイデンティティや先住民としての歴史，いいかえれば出自(日本人とは異なった固有性)や過去の否定によってのみ，「日本人」として存在することを許された「アイ

ヌ」の逆説でもある。

これまでみたように，20世紀初頭の海外における「アイヌ」に関する言説には，日本人との異質性とともに，肌の白さについて書かれたものが多く見られた。そして，「白人」（コーカソイド）との親縁性について，数多くの資料で言及されている。しかし当時の日本社会における「アイヌ」に関する言説には，「アイヌ」と「西洋人」の共通性や，人種的・文化的同質性や親縁性を見ることはできない。オイディプスが出自の否定を前提としてのみ，テバイの社会での関係を実現し，テバイの王として自己を実現できたのと同じように，アイヌの人々もまた白い肌との関係，あるいは出自の独自性(「アイヌ民族」あるいは「アイヌ文化」）の否定を介してのみ，「日本人」として生きることが許されたといえるだろう。均質な国民国家を実現しようとする日本で，アイヌの人々が「白人性」や独自の「民族性」，あるいは先住民としての歴史を，アイデンティティの一部として主張して生きることは，オイディプスが過去の真実を明らかにしたと同じように，「真実」を確認することによって，現実の「日本人」としての自己を否定することでしかなかった。「単一民族神話」が支配しつつあった日本社会で，「異民族」の存在を明らかにする事は，それまでの神話を覆してしまう。その結果として，「同化」と「差別・排除」という二重拘束によってのみ成立していた，欺瞞的であると同時に現実的な，日本社会における「アイヌ」という存在も否定されてしまうのだ。なぜなら，隠された差異を明らかにすることは，「日本人」の境界を日本国内に創り出してしまう。そして，同化を根源的に否定し，日本国内では存在が許されない，空虚な存在，存在するはずのない他者の存在だけを残すからだった。しかし一方で，黄色い仮面の「日本人」として生きることは，オイディプスがテバイでつかの間の「幸福」をつかんだように，本当の自己を忘却し否定することによってのみ手に入れることが出来た，一時的な「幸福」でしかなかったはずである。(注13)

アイヌの人々が，さまざまな可能性をひめたキメラのような貌を失い，黄色い仮面のオイディプスとして日本社会で生きなければならなかったのは，この1910年の日英博覧会が開催された時期を境にしてのことだといえるだ

ろう。しかし，博覧会に参加したアイヌの人々は，国家に強く拘束されながら放置される一方で，沈黙することなく一つの社会集団としてメッセージを発していた。それは，同化と差別という二重拘束のもとでも，したたかに固有のアイデンティティを見い出し，それを発信する主体性を保持していた事を示しているだろう。

注

（注１）日本人には二つの意味がある。一つは国民国家日本の国民としての日本人であり，もう一つは，和人やシャモとも呼ばれる，エスニック（民族）集団としての日本人である。本論では，この二つを区別するため，前者を「日本人」，後者を日本人と表記することにする。

（注２）櫛引弓人（1859～1924）は慶応義塾に学び，1885（明治18）年に渡米したが，その後の1893年のシカゴ博覧会，1904年セントルイス博覧会，1909年シアトル博覧会などで日本展示を手掛けた，当時の日本では数少ない海外に通じた興行師だった。シカゴ博覧会をはじめとする万国博覧会に芸者を参加させたり，欧米で大成功を収めた川上音次郎一座の川上貞奴の興行を実現したのも櫛引である。そして日英大博覧会では，日本国内における余興の手配だけでなく，ロンドンの博覧会場における日本村の支配人もつとめている。

（注３）日英博覧会で販売されたアイヌの絵葉書のなかから，４人家族のもの，10名の参加者全員が揃って写されたもの，旅券資料に残された家族構成や年齢を照合すると，写真のそれぞれの人物が誰であるかを推定することが出来る。10名全員が車座になって写された絵葉書の人物は，右側から，貝沢シランヘノ，平村カナカトク，門別シノツテカン，貝沢賢治，門別ぬかつとけ，貝沢あんれとく，貝沢らたらしの，貝沢すえ，貝沢善助，貝沢忠吉だと考えられる。

（注４）この主張は，日本の石器時代人が，エスキモーに似たアイヌとは異なるコロボックルと呼ばれる先住民だったのか，それともアイヌだったのかというアイヌ・コロボックル論争で，コロボックル先住民説の主唱者であった坪井としては当然だった。しかし，博覧会におけるアイヌについて書かれた日本側の言説で，アイヌ先住民説に触れたものはない。また，金田一京助によれば，明治11年の大森貝塚の発見調査以来，「アイヌは日本全土に住んだもの」と考えられて，内地の地名をアイヌ語で解釈する事が流行したという。そして，明治20年にはチェンバレンが『アイノの研究から見た日本の言語・神話・地名』を出版して，「縦横無尽に日本全土の地名をアイヌ語で解釈するという事などが起こった。」（金田一　1961；553-555）このような，「アイヌ原住民説」流行直後

における先住民性の否定には，強い政治的・イデオロギー的要素が働いていたと考えるべきだろう。

(注5) 1904年のセントルイス博覧会においても，米国側の言説ではアイヌの肌の白さについて頻繁に言及されるのに対して，日本ではアイヌとコーカソイドあるいは白人との親縁性について言及しない。また，コロボックル論争でアイヌ先住民説をとる小金井良精が1904年に書いた『日本石器時代の住民』でも，アイヌと白人やコーカソイドとの同一性，あるいは人種的親縁性には全く言及していない。(小金井　1904)

さらに，金田一京助は大正12年 (1923年) に出版された「アイヌの系統」のなかで，「アイヌは白人の遠い分派？」という一節を設けて，海外のアイヌ白人説を簡単に紹介している。しかし結論では，「アイヌと白人との間の関係は，よしんばあると言ってもほとんど無いに近いほどの遼遠な関係をもつと言っていいのであろう」と，明確な根拠を示さないまま「アイヌ白人説」を否定してしまっている。(金田一　1961；330-334)

(注6) ワシントン (Booker T. Washington, 1856-1915) は19世紀末から20世紀初めの，アメリカにおける初期の黒人教育家で，黒人の地位向上のためには教育活動が重要だとした。

(注7) この『太陽』と同様の記述は，ホッタ・リスターが引用している，1911年に内が崎が東京で出版した『英国より祖国へ』にも見られる。(Hotta-Lister 1999; 143-144)

(注8) 日露戦争に出征し，「武勲」をあげたアイヌの兵士としては，北風磯吉がよく知られている。(佐藤　1985)

また，知里幸恵について綴った『銀のしずく降る降る』には，幸恵の父親の高吉が日露戦争に出兵し，旅順攻撃に参加して金鵄勲章を貰ったと書かれている。高吉もこの記録における，金鵄勲章を受けた3名のアイヌ兵士の一人だったと考えられる。(藤本　1973；27)

(注9) 軍人となったアイヌについては，1910年に道内を視察した文部省視学官が，白糠第二校下で見聞したという，次のような逸話を小川が紹介している。

「日露戦争の際土人船田久助といふ者旭川連隊に編入せられ戦功により勲八等に叙せられたソコで土人部落一般に非常の感動を与へたのである人間外に取り扱はれて居った土人が幾多のシャモ軍人が勲章を貰はぬのに土人が貰ったのは非常の名誉と感じたのである中にもヌクシオシロシといへる土人率先して凡て国の為め尽くせば土人でも其功労を表彰せらるゝ是皆教育のお陰である教育に尽くさねばならぬと熱心に土人部落に説き廻った」

小川はこのような徴兵・兵役という途が，アイヌにとってシャモ「互」して「功」をあげる術となっていたとのべている。(小川　1997：283-284)

(注10) セントルイス博覧会には多くの芸者が参加し，日本舞踊の上演や，展示場における翻訳された日本の本や写真などの販売，あるいは娯楽ゾーンのパイクに設けられた茶室での観客の接待で，多くの米国人に感銘を与えた。(Reid 1904: 274, Clevenger 1996:

138-139)

しかし，14人の芸者が米国滞在を願う嘆願書を書き，17人が帰国を拒否して，セントルイスにとどまることを要求するという事件を起こしている。そして，脱走を防ぐために警官が監視するまでになり，帰国を強制する日本側と，帰国を強制する権利はないとする芸者側で問題がこじれ，ワシントンにまで判断が持ち込まれている。(外交資料館資料「米国合衆国ミゾラ州セントルイス市ニ於テ万国博覧会開設一件」明治37年10月15日資料) しかし，「事件」を起こした芸者たちは，最終的には移民法違反を理由に帰国せざるをえなかった。(New York Times；1904年11月18日)

(注11) 北海道では明治12年から明治42年まで，郡区町村編制法にもとづく戸長役場制が施行された。しかし，明治時代の府県下にある戸長や町村長は，町村会から選ばれた地域との結びつきの強い名望家が，無給の名誉職として担っていたのに対して，北海道の戸長・村長は官選で選ばれた官庁の下僚で交代も頻繁だった。これは，北海道における戸長は，治安や行政の地域社会における遂行者としての側面が強かったためで，国家行事である日英博覧会への参加者の斡旋が戸長によって行われたのも当然だった。(新門別町史・上巻　1995；615)

(注12) 1910年11月2日付の『Daily　News』紙は，博覧会中にアイヌ村で1人，台湾(Formosan)村で1人，計2人の子供が産まれたことを報じている。このアイヌ村で生まれた子供が，貝沢英博と名づけられた子供だろう。(Mutsu 2001: 179)

(注13) アイヌの人種的位置づけと，「大和民族」との関係については，昭和10年代に至るまで明確な回答を避けるように曖昧なまま残された。大正11年に金田一京助は次のように書いている。

「換言すればアイヌと白人の間の関係は，よしんばあると言ってもほとんど無いにも近いほどの遼遠な間隔を持つと言っていいのであろう」(金田一　1961 (1922)；334)

また昭和15年には，児玉作左右衛門が次のように書いている。

「(アイヌの)人種学上に於ける所属に就いては種々の説があり，今日未だ確定的の結果には到達していない。或は蒙古人種，ヨウロッパ人種，南洋人種，オーストラリア人種，古代アジア人種，或は又アメリカインディアン，印度のトダ族，朝鮮の或る北方民族，フィリピンのイフガオ族等と沢山の類似のものが学説に上って居る。或いはまたアイヌはどの人種にも属しない所の一つの人種の孤島 Rasseninsel であると云う説も唱えられている。

次にアイヌ民族と大和民族とは如何なる関係にあるかに就いても前同様に決定的の域には到達していない。之れに三つの説があり，第一は日本石器時代人はアイヌであると云う説，第二に日本石器時代人は類アイヌであるという説，第三に日本石器時代人はアイヌでも無く又類アイヌでも無く全く別種のものであると云う説である。之等の関係の解決は大和民族の体質の研究上に欠くべからざる要素であると信ずるものである。」(児玉　1940；1)

その後，敗戦後の昭和20年以降になると日本国内でも海外の「アイヌ白人説」が紹介されるようになり，本格的な実証的研究が行われるようになる。昭和33年の「本州アイヌの歴史的展開」のなかで，金田一京助は本文に入る前の注意事項として次の3点を上げて，「アイヌ白人説」を支持している。

「一　アイヌは，日本全土の原住民ではなく，ただ東北地方の原住民だったこと。

二　蝦夷非アイヌ説も出ているけれど，蝦夷はやはりアイヌであったこと。

三　アイヌ白人説は，英米学界に決定的になりつつあって，アイヌは決して劣等種族ではなかったということ。」（金田一　1961（1958）；387）

しかし，その後の埴原和郎などの研究によれば，「アイヌ白人説」は自然人類学的に否定され，アイヌ人は和人と同じモンゴロイドだとされている。（梅原・埴原　1982）

参考文献

朝倉無声　2002『見世物研究』ちくま学芸文庫　筑摩書房

梅原猛・埴原和郎　1982『アイヌは原日本人か』小学館

小川正人　1997 a「イオマンテの近代史」札幌学院大学人文学部編『アイヌ文化の現在』札幌学院大学人文学部

小川正人　1997 b『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会

小川正人・山田伸一　1998『アイヌ民族　近代の記録』草風館

小熊英二　1995『単一民族神話の起源〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社

川上勇治　1991『エカシとフチを訪ねて』すずさわ書店

川嶋康男　1979『北の昭和放浪芸』太陽選書

川添　裕　2000『江戸の見世物』岩波新書

木下直之　1996『写真画論』岩波書店

木下直之　1999『美術という見世物；油絵茶屋の時代』ちくま学芸文庫　筑摩書房

金田一京助　1961『アイヌ文化志　金田一京助選集II』三省堂

クライナー，ヨーゼフ　1997「ヨーロッパ人の抱いたアイヌ観とヨーロッパにおけるアイヌ研究」『欧米アイヌ・コレクションの比較研究』文部省科学研究費補助金（学術調査）研究報告書　1994-1996年度（課題番号　06041047）

小金井良精　1904『日本石器時代の住民』春陽堂

児玉作左右衛門　1940「アイヌの頭蓋学及骨学」『児玉作左右衛門論文集』出版者不明（北海道大学北方資料室）

先川信一郎　1987『ロウ管の歌；ある樺太流刑者の足跡』北海道新聞社

佐藤幸夫　1985『北風磯吉資料集：アイヌネノ・アン・アイヌ（より人間的である人間）』市立名寄図書館

佐藤健二　1994『風景の生産・風景の解放』講談社選書メチエ
スタール・フレデリック　1924　津田敬武訳補『世界人種物語』厚生閣
スチュワート，スーザン　1996　高山宏訳「欲望のオブジェ ── スーベニールについて」『世界文学のフロンティア 4』岩波書店
ソポクレス　1967　藤沢令夫訳『オイディプス王』岩波書店
太陽　1910『太陽臨時増刊　日英博覧会』第 16 巻　第 9 号，博文館
高木博志　1994「アイヌ民族への同化政策の成立」歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店
鳥居龍蔵　編　坪井正五郎　校閲　1902『人種誌』嵩山房
富山一郎　1996「測定という技法；人種から国民へ」『江戸の思想』第 4 号，119-129 頁　ぺりかん社
中沢新一　1977「街路の詩学 ── 見世物芸の記号論的分析にむけて ──」『思想』No.640，1977 年 10 月号，123-138 頁
中沢新一　1983「視覚のカタストロフ；見世物芸のレトリックと形象性」ターナー・ヴィクター，山口昌男　編『見世物の人類学』三省堂
二風谷部落誌編纂委員会　1983『二風谷』二風谷自治会
農商務省　1912『日英博覧会事務局　事務報告』
計量智子他　1985『近代化の中のアイヌ差別の構造』明石書店
馬場脩　1979『北海道ライブラリー14・北方民族の旅』北海道出版企画センター
バチェラー・ジョン　1965　仁多見巌訳『ジョン・バチェラーの手紙』山本書店
バチラー，ジョン　1928『ジョン・バチラー自叙伝：我が記憶をたどりて』文録社
藤本英夫　1973『銀のしずく降る降る』新潮社
北海道新聞社会部　1991『銀のしずく；アイヌ民族は，いま』北海道新聞社
松田京子　2003『帝国の視線　博覧会と異文化表象』吉川弘文館
村上久吉　1942『あいぬ人物傳』平凡社
Bateson, Gregory 1958 “Naven” Stanford University Press
Bird, Isabella L., 1881 “Unbeated Tracks in Japan” G.P. Putnum’s Sons
Breitbart, Eric 1997 “A World on Display: Photographs From the St.Louis World’s Fair 1904” University of New Mexico Press
Edwards, E. ed., 1992“Anthropology and Photography 1860～1920” Yale University Press
Fox, T.J., and Sneddeker, D.R., 1997 “From the Palaces to the Pike; Visions of the 1904 World’s Fair” Missouri Historical Society Press
Hotta-Lister, Ayako 1999 “The Japan-British Exhibition of 1910; Gateway to the Island Empire of the East” Japan Library
Japan-British Exhibition Oficial Guide, 1910 Bemrose & Son’s

Kowalski, Witold 1995'Materials from Pilsudki's Conference: The European Calendarim (Bronislaw Ginet-Pilsudki in Europe 1906-1918' in Majewicz, A.F., & Wicherkiewicz, T., eds., "Linguistic and Oriental Studies from Poznan vol.2" Poznan

Kreiner, Josef 1993 'European Images of the Ainu and Ainu Studies in Europe' Kreiner. J., ed."European Studies on Ainu Language and Culture" Indicium-Verlag

Mutsu, Hirokichi 2001 "The British Press and the Japan-British Exhibition of 1910" Curzon

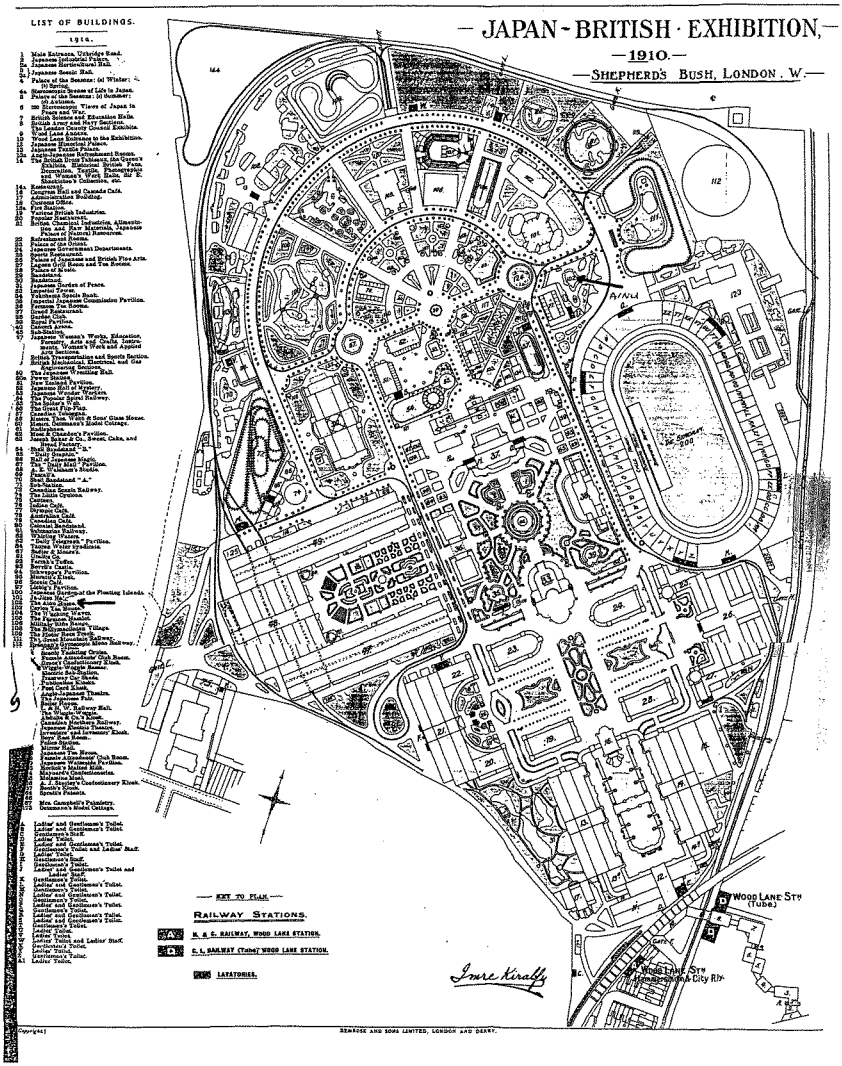
Rydell, R.W., 1984 "All the World's a Fair; Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916" University of Chicago Press

Shepherd's Bush, 1911 "Official report of the Japan British Exhibition" Unwin Brothers

Street, Brian 1992 'British Popular Anthropology: Exhibiting and Photographing the Other' in Edwards, Elizabeth ed., "Anthropology and Photography 1860-1920" Yale University Press

Starr, Frederick 1904 "The Ainu Group at the Saint Louis Exposition" The Open Court Publishing Company, Chicago

Starr, Frederick 1910 'The Ainu of Yezo' "The Japan Magazine" March 1910, pp.118-124


— JAPAN-BRITISH · EXHIBITION,—
—1910.—
—SHEPHERD'S BUSH, LONDON, W.—
LIST OF BUILDINGS.
1910.
— KEY TO PLAN. —
RAILWAY STATIONS.
G. & C. RAILWAY, WOOD LANE STATION.
C. L. RAILWAY (Tube) WOOD LANE STATION.
LAVATORIES.
WOOD LANE STN (Tube.)
Imre Kiralfy

日英博覧会全景